

# 近代社会における「知能」

## バルザックの場合

東 辰之介

### 「知能」による新秩序

バルザックの『人間喜劇』が刊行され始めたのは1842年のことであるが、これはそれまで十余年にわたって書き続けられてきた作品群に、相当数の新作を加えて一つの大きな全体を作ることを目的としていた。バルザックは予定作品のすべてを書きあげる前の1850年に亡くなってしまいが、『人間喜劇』という一つの作品を生み出そうとする作家の努力は最後まで続けられ、種々雑多に見えた作品群が縦横に結び合わされることになった。

この統一化の過程における最も困難な仕事の一つに『人間喜劇総序 (Avant-propos)』の執筆があった。バルザック自身はあまり乗り気ではなかったようだが、フェルヌやエッツェルら『人間喜劇』の出版業者にせかされ、紆余曲折の末、本人が書く羽目になったようだ。校正刷りを手にしたバルザックは「作品一つ書く以上に、この26ページには苦勞させられました<sup>1</sup>」と述べているが、この序文のおかげでわれわれは、『人間喜劇』全体を理解するための作者自身による一つの入口を手にするようになったと言える。

『総序』において繰り返し用いられるのが「社会種」という概念である。

「社会種 *Espèces Sociales*」とは「動物種 *Espèces Zoologiques*」との対比において理解されるべき用語で、「兵士、職人、行政官、弁護士」といったさまざまなタイプの人間の間にある相違は、「狼」と「羊」の間にある相違にも匹敵するという考えがその根拠にある。そしてこの「社会種」こそが、『人間喜劇』全体をひとつの視点からまとめあげる魔法の言葉であった。すなわちバルザックは「社会種」をもれなく記述するのが『人間喜劇』の目的であると説明するのである。確かに二千人を超す登場人物がいれば、そうした説明に説得力がないこともない。こうして多様な作品の集合体であるところの『人間喜

---

<sup>1</sup> *Lettres à madame Hanska*, édition établie par Roger Pierrot, Laffont, « Bouquins », 1990, 2vol., t. I, p. 594, 13 juillet 1842.

劇』に、少なくともビュフォンの『博物誌』が持つと同程度の一体性が与えられることになった。

しかし、ここで一つの疑問が生じる。はたして「社会種」の網羅的記述とはどの程度の意味を持つものなのだろうか。『総序』の内容を「社会種」の一言で要約することは単純化のそしりを免れないだろうが、それにしても、ばらばらに見える作品群を一つにまとめようという意図を持って序文を書くときに、長大な作品が備えるはずの百科事典的な性質を第一に語るというのは、逆にその統一的意味の薄弱さを言うようなものではないだろうか。『人間喜劇』がフランス近代社会を解剖した極めて興味深い作品であることは間違いないのだが、『総序』にある説明を読むだけではそのユニークさを理解することはできない。なぜ人間はこれほど多くの「社会種」に分かれてしまうのか、そして一人の人間がある「社会種」であって別の「社会種」ではない理由は何なのか、こうした問いに対する答は性質上慎重にならざるを得ないこうした序文にではなくて、作品そのものの中に書かれている。

一例をあげるなら、『総序』執筆の8年前、1834年に刊行が開始された『哲学的研究(Études philosophiques)』のために改稿された『ルイ・ランベール』(初版1832年)の一節においては、人類は大きく下位、中位、上位の三つに分けられ、さらになぜこのような区別が生じるのかが説明されている。すなわち行動がその中心的活動であるところの「本能人 Instinctif」、観念の操作を仕事とする「抽象家 Abstractif」、そして事物をその全体において一挙に見て取ることのできる「特殊家 Spécialiste」という三区区分である。これらの用語についてここで深く検討する余裕はないが<sup>2</sup>、少なくともこの区分が種々の人間を横並びにする傾向の強い「社会種」の考え方よりも大胆な仮説を提示していることは明らかだろう。これに従えば『人間喜劇』の登場人物たちはただ漫然と遍在しているのではなく、ダンテの『神曲』における死者のごとく三つの層に分かれて存在していることになるからだ。

ではこうした三層構造はなぜ生じるのであろうか。ルイの説明によれば「知能」の高い人間と低い人間がいるからということになる。例えば、人類の大部分は「本能人」であり、彼らは「抽象という人間の知能(l'intelligence humaine)の第二段階まで高まることなく生まれ、働き、死んでゆく<sup>3</sup>」とされる。とな

<sup>2</sup> この三区区分の由来や抽象家と特殊家の違いについては、アンリ・ゴートイエが詳細に論じている。Henri Gauthier, *L'image de l'homme intérieur chez Balzac*, Droz, 1984.

<sup>3</sup> Louis Lambert, *La Comédie humaine*, nouvelle édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, 12 vol.(以後 CH

ると『人間喜劇』は、人類をその「知能」のあらゆる段階において描き出した作品である、という説明が可能になるかもしれない。ある人間が自分に割り当てられた「社会種」に属しているのは、それにふさわしい「知能」を持っているから、あるいはそれだけの「知能」しか持っていないからなのである<sup>4</sup>。

したがって、バルザックによる人類の分類表は単に「戸籍簿と競い合う<sup>5</sup>」ことに満足するものではなくて「知能」という尺度によって人類を階層化するものとなるはずだが、ここでさらに問われなければならないのは、なぜ「知能」という基準が用いられるのか、そしてなぜ人類の間にそうした「知能」の格差が生じるのかという問題であろう。これについて考える手がかりは、1830年10月から『ラ・モード』に連載された『優雅な生活論』に見出される。ここでは当時の歴史的社会的背景が描かれ、それとの関係において「知能」という基準の重要性が明らかにされている。1830年10月、すなわち七月革命の直後において、バルザックは次のように述べる。

思考で武装した人間が、甲冑で身を固めた騎士にとって代わったのだ。[……] 知能がわれわれの文明の中心軸となった。これこそが祖先の血によって賸われた進歩のすべてなのだ<sup>6</sup>。

ここに見られるのは、近代になって「知能」が社会の構成原理として大きく浮上したという認識である。それまでの貴族階級は生まれの特権あるいは武力によって社会の上層に位置することができたが、大革命そして七月革命によって封建制度が崩壊した結果、「知能」という武器がなければその地位を守りきれなくなった。逆に「知能」さえ高ければ、だれしも社会の上層に地位を築くことのできる世の中になったとも言える。『人間喜劇』とは「知能」を基準として再構築されつつある近代社会の始まりを網羅的に描きだそうとする試みであり、その限りにおいて文明の歩みの批判的検討としての価値を持つ作品であると言えるだろう。

しかしながら、根本原理を探ろうとするバルザックの思考は、さらなる問

---

と表記)、t. XI, p. 687.

<sup>4</sup> 『総序』においても、人間の「知能」に差があることが指摘されている。「(動物だけでなく)人間もまた互いに襲いかかる。しかし、彼らの知能に多寡(plus ou moins d'intelligence)があるせいで、その戦いはずっと複雑になるのだ。」*Avant-propos, CH, t. I, p. 9.*

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 10.

<sup>6</sup> *Traité de la vie élégante, CH, t. XII, p. 222-223.*

いに答えようとする。そもそも「知能」の高低はいかにして決まるのか。これに対するバルザックの解答は非常に興味深いものである。環境や個人の努力といった要素が無視されるわけでは決してないのだが、生まれつきの身体器官や体質がとりわけ問題にされるのだ。

万人が同等の知能をそなえていると考えるのは間違っている。同じ知能をそなえるには、器官の力と訓練度と完成度が同じくらいでなければならないはずだが、人間の器官(organes)がそれほど似通っているはずがない。特に文明人の間では、二つと同じ体質(organisations)を見つけることはできないだろう<sup>7</sup>。

ここで« organes »とか« organisation »といった用語が指し示しているのは、その違いによって「知能」に差が出るということから判断すると、「脳」あるいはその活動に直接関連する器官であることが予想される。バルザックは人間の知的水準の決定要素として「脳」を始めとする器官の質を重要視しているのである。

実は、この一節に読み取れる「知能」の器官決定説ともいうべき考えは、バルザックによってしばしば表明されているものだ。例えば「脳」内に思考が生まれ、発展してゆくさまについて多く書かれている『歩きかたの理論』(1833)には、歩行についての思索がどれほど強力な身体諸器官を必要としたかを言うために「私のような胸部、首、頭蓋の持ち主でなかったなら、万策尽きて正気を失っていたことだろう<sup>8</sup>」とあるが、これは単なるユーモラスな自己顕示ではなく、「脳」の活発な活動には強い心臓とその血流を「脳」に力強く伝達するための太く短い首が不可欠であるとバルザックが真面目に考えていたがゆえなのである<sup>9</sup>。

人間の能力に関するこうした一種の決定論からは、出生によって生じる不平等を廃したはずの近代社会における序列もまた、天から授かった「脳」やその他の器官の出来具合によって相当部分決定されてしまうという実に皮肉な考察が導き出されるだろう。近代社会は世襲身分制による秩序を「知能」の高低による秩序へと置き換えたわけだが、一見すると自由な競争の上に成

<sup>7</sup> *Ibid.*, p. 222.

<sup>8</sup> *Théorie de la démarche*, CH, t. XII, p. 274. 「頭蓋」に対応する通常用語は« boîte crânienne »であるが、バルザックは« boîte cérébrale »と書いている。「脳蓋」と訳すべきかもしれない。

<sup>9</sup> 拙論を参照。「バルザックの人物描写における解剖学的視線 — 「短い首」の意味するもの」、『仏語仏文学研究』第26号、東京大学仏語仏文学研究会、2002年、p. 47-64.

立しているように思えるこの新しい原理にしても、「脳」機能の良し悪しまで平等化できるわけではない。

「知能」の高低を基準とする新しい近代的人間ピラミッドはまだ完成しておらず、封建制のピラミッドと徐々に入れ替わってゆく最中であるがゆえに不安定な状態にあるが、「人体器官の完成度<sup>10</sup>」に個人差がある以上、いずれ構造的な安定へと向かうはずのものである。しかしながら、全知の立場からは程遠い認識の次元にいるバルザックの登場人物たちはそのことを知らないし、自分自身の限界を知る由もない。結果として、自分の能力以上の野心を抱いて挫折する人物が続出することになる。近代社会における「知能」の重要性とその限界の計りがたさ、これを題材にしてバルザックは幾多のドラマを描く<sup>11</sup>。その限りにおいて『人間喜劇』は、まさしく近代黎明期のダイナミズムを描いた作品であると言えるのではないだろうか。

### 社会が求める「知能」の特質

それにしても、「知能」のピラミッドにおいて相対的上位を占めるために必要な頭の良さとは、具体的にはどのような才能を言うのだろうか。おそらくそれは、ルイ・ランベールなど天才型の登場人物が持つ強力な想像力や透視力といった特殊な能力とは別のものであろう。そうした特殊能力は一般社会で成功するために必要なものとは思われないし、大多数の人間の能力を測るための参考にもならないだろうからだ。「本能人」においてはやや未発達であるが「抽象家」においてはそれなりの水準に達しているような何らかの能力、すなわち『金色の眼の娘』(1834)の冒頭を飾るパリの階層構造から具体例を引くなら「労働者」や「小市民階級」が不得意とし「事業家」や「司法官」らが得意とするような精神活動、それこそが社会的上昇に価値のある才能ということになるだろう。

ここで注目されるのが、『歩きかたの理論』における次のような一節である。

魂は遠心力で得るものを求心力で失う。

ところが、野蛮人と子どもは、球状に広がる生活圏のあらゆる半径を唯一の思考、唯一の欲望に向けて集中させる。彼らの生活はただ一事を追求するのであり、その強さは行動の驚くべき一貫性から生じる。

<sup>10</sup> Louis Lambert, CH, t. XI, p. 685.

<sup>11</sup> 本稿の後半で扱う『セザール・ピロトー』がその典型である。

社会的人間は、常に中心から周囲上のあらゆる点へと向かわざるをえない。無数の情念や考えを持ち、基地と作戦行動の広さとがあまりに不釣り合いなため、絶えず弱さの現場をおさえられてしまう<sup>12</sup>。

社会に生きる人間は、野蛮人や子どもよりもずっと広い生活圏に住んでいるために、その注意力を各地に分散して使用せざるをえず、結果としてどこかで注意力不足が生じてしまう、そこに社会的人間の弱さがある、というこの考察は、裏を返せば社会で成功するためにいかなる能力が必要であるかを示唆しているように思われる。それはもちろん野蛮人や子どものように生きる能力ではなく（おそらくすぐにどこかで足元をすくわれてしまうから）、広い生活圏をしっかりと見渡し、諸活動を同時・平行処理することができる能力である。

このように予想されるバルザックの考えを最もよく表しているのが、フランソワ・ピロトーとセザール・ピロトーの物語である。二人は三人兄弟の長男と三男で、兄はトゥールの司祭、弟はパリの香水商として登場するが、父が小作人、母が小間使であったということからすると、ともに出身階層よりも上位の「社会種」になることに成功した人物であると言えるだろう。しかしながら、この順調な上昇運動は彼らの後半生において挫かれ、二人とも見事なまでの社会的失墜を経験することになる。それこそが『トゥールの司祭』(1832)と『セザール・ピロトー』(1837)の中心的テーマとなるのだが、二人の破滅の原因の一つが、どうやら複数の事柄を同時並行的に処理する能力の不足にあるようなのだ。

兄ピロトー神父の破滅を要約する事件は、居心地のいい部屋を失ったことと、住み慣れたトゥールの教区から追い出されたことであるが、こうした不幸がなぜ引き起こされたのかについて、まず考えてみたい。第一に挙げられるのが、ガマル嬢との下宿契約においてあまりに不注意であったことだろう。『トゥールの司祭』の語り手はピロトー神父の不注意さの理由を次のように説明している。

衰れなピロトーは、いつの日か自分をガマル嬢から引き離すような原因を何一つその子どもの脳みそにおいて想像できなかったので、彼女のもて死ぬ気でいたのだった。彼はこの条項についてまったく記憶がなかった。条項の用語は事前に検討されさえしなかった。老嬢の世話になりたいと渴望するあまり、出された文書すべてにサインしてしまったであろう契約時には、それほど

<sup>12</sup> *Théorie de la démarche*, CH, t. XII, p. 283-283.

までに彼女が公正に見えたのだった<sup>13</sup>。

「子どもの脳味噌 *cervelle d'enfant*」という表現からは、『歩きかたの理論』において描かれていた一つのこどしか欲しないとされた「子ども」が想起されるが、実際ピロトーは、長い間欲念の目で見ていた故シャプルー神父の部屋に入居するという喜びに有頂天になってしまい、契約という将来にわたる利害関係の取り決めにはまったく注意を払う余裕がなかったようだ。ピロトー神父が現在の溢れる感情のみにその「知能」のすべてを明け渡してしまい、残りの部分において完全なる弱さを露呈してしまっている様子がこの一節に描かれている。

ピロトー神父の不幸の第二の原因は、ガマール嬢の性格のとげとげしさを理解して、その感情を傷つけないように巧みに振る舞うことが出来なかったことにある。

たとえ生まれつき知能が欠落して(*aveugle d'intelligence*)いなかったにせよ、彼の目は幸福のせいであまりに眩んでしまっていたので、ガマール嬢の人となりを見極め、彼女との日々の関係において守るべき節度について、熟考することなどとうてい不可能だった。(195)

故シャプルー神父は「この女主人の性格を完全に判断(192)」し、「ガマール嬢のもとでの自分の振る舞いを思慮深く計算(193)」したからこそ、十二年にもわたる物質的幸福を勝ち取ることができたのに、ピロトー神父はそうした隠れた努力があったとは露ほども知らず、自分も無条件で老嬢の細やかな世話を受けられると思ったのであった。『歩きかたの理論』における比喩を借りるならば、社会生活を取り囲む円周上のある一点において自分の幸福を味わうという行為に専念していたために、反対側が壊れつつあることにまるで気づかず、ようやく振り向いたときにはもうすべてが修復不能になっていた、という図式によってピロトー神父の破滅を説明できるのではないだろうか。

さらにここで注目されるのが、ピロトー神父と完全な対比をなし、結末において大出世を実現するトゥールペール神父の精神的風貌である。なぜならそれは、『歩きかたの理論』で指摘されていた社会的人間の弱さを完全に克服した例外的人間のそれとして描かれているからである。トゥールという狭い世

---

<sup>13</sup> *Le Curé de Tours*, CH, t. IV, p. 224. 以下『トゥールの司祭』を参照する際は、引用後の括弧内に頁数を示す。

界しか見ていない人々に抜きんでてパリの勢力と結び、政府と教会の間の権力ゲームを利用する術も知っているトゥルベール神父の精神は、自分のごく身近の事柄さえ整理をつけて処理することのできなかつたピロトー神父の精神の対極にあるだろう。いずれにせよ、『歩きかたの理論』(1833)執筆の後、1834年に『トゥールの司祭』の結末に付け加えられた1ページほどの人類史の概観は、凡人ピロトー神父と、異才トゥルベール神父との違いを際立たせるために書かれたものと思われる。

人間がその中で動き回る円は、知らぬ間に広がっていった。この円を総合的に把握することのできる魂は、素晴らしい例外でしかないだろう。なぜなら精神においても肉体においても、運動はその広がりにおいて得るものを強度において失うのが常だからである。社会は例外の上に築かれるべきではない。初めのうち人は、ただ単に父であった。その心臓は家族の範囲内に集中されて熱く鼓動していた。その後彼は氏族のために、あるいは小さな共和国のために生きた。[……] 今日では彼の命は広大な祖国のそれに結びつけられている。やがて彼の家族は世界全体になるということだ。[……] しかし、ああ、人間の諸器官はそんな神のような規模を持ち合わせていない。偉大な人間のみが有する感情のあり方に合うほど十分に広い魂は、決して一市民の魂でも家族の父の魂でもないことだろう。(244)

人間の生活圏を球や円に喩えて、その拡大がエネルギーの分散すなわち弱さへと通じるという考え方は、『歩きかたの理論』で表明されていた説と同一のものである。社会的人間の生活圏は拡大するばかりであるが、人間の諸器官(machine humaine)の能力には限界がある。近代社会の複雑な仕組みを理解することができるのは、例外的な才能に恵まれた一握りの人間、上記の引用に続く箇所<sup>14</sup>の表現を用いるなら「脳(cerveau)が巨大化(244)」した人間だけなのだ。バルザックは、司教となった勝利者トゥルベール神父と犠牲者ピロトー神父を対比的に提示した物語の最終場面<sup>14</sup>にこうした考察を付け加えるこ

---

<sup>14</sup> 「トロワの司教、イヤサント閣下がサン＝サンフォリアンの河岸沿いをパリへと向かう駅馬車に乗って通りかかった時、哀れなピロトー神父はテラスの上の脇掛椅子で日に当たっていた。大司教から罰せられたも同然の哀れな司祭は顔色が悪く痩せていた。顔立ちの至る所に刻まれた悲しみは、あれほど穏やかで陽気だった以前の顔をまったく変えてしまった。かつてはごちそうの楽しみによって無邪気に輝き、重々しい考えなどなかったその目は、病気のせいでその下に思考の存在を思わせるヴェールがかかっていた。それはもはや、空っぽではあるが満足した様子で司教館を駆け回るように動き回っていた一年前のピロトーの抜け殻でしかなかった。司教は自分の犠牲者に軽蔑と哀れみの視線を投げ、彼を忘れてやることにして通り過ぎた。」(243)



とによって、『歩きかたの理論』において挙げられていた社会的人間の弱さを克服できたのがトゥルベール神父で、できなかったのがピロトー神父であると読者が解釈することを望んだのではなかろうか。そうした意図を汲むならば、ピロトー神父の弱さは、確かに途方もなく戯画化されているとはいえ、多方面への注意を要求する近代社会に生きる人間ならば誰しも抱える問題と無縁のものではないと言えるだろう。

### セザール・ピロトーの場合

近代社会の持つダイナミズムはその構成員に「知能」に応じた地位を与えつつある、という認識をバルザックのうちに認めた上で、その場合の「知能」が具体的にどんな能力を指すのかを検討した結果、拡大した世界に対応するための複眼的ともいべき注意力の有無が特に注目されたわけであるが、この総合的思考力と社会的地位の関係が初めて本格的に問われたのが、『セザール・ピロトー』(1837)においてであった。これ以前においては、純理論的な思索によって夢想されたにすぎない「知能」と「社会的地位」を結ぶ等号が、現実の社会にあるはずの種々の副次的要素によって揺らぎながらも、最後にはその妥当性を見せつけるさまがここには描かれている。以下において、セザール・ピロトーに付与されている「知能」と、物語が始まる時点での社会的地位を初期条件として確認した上で、彼を襲った破産という社会的失墜とそれに続く全額返済という復権がどのようなメカニズムによって起きたのかを詳述するが、その準備として作品中に次のような総括的考察があったことを思い出しておきたい。

生じた結果がもはやその原因と直接的な関係になく、適正な釣り合いもとれていないとき崩壊が始まる、という国家のみならず個人の命運をも支配しているにちがいないこの法則を、なぜ新たなるピラミッドによって絶えず喚起しないのであろうか<sup>15</sup>。

この一節は、全16章に分割されていた初版の第2章、すなわち「セザール・ピロトーの前歴」と題されたフラッシュバックの結末部に置かれ、続く第3章から語られるピロトーの運命、すなわち破産という「崩壊」劇を予告する

<sup>15</sup> *César Biotteau, CH, t. VI, p. 81.* 以下『セザール・ピロトー』を参照する際は、引用後の括弧内に頁数を示す。傍点部は原文における強調箇所。

重要な役割を担っているのだが、ここにおいて注目されるのは「原因」と「結果」の不釣り合いによって「崩壊」が説明されている点である。個人における「結果」は、それを支える「原因」に見合った限りでしか安定しないというこの考えは、個人の社会的地位は最終的にはその人の「知能」によってしか支えることができない、という考えを一般化して表現したものと解釈できる。いずれにせよ、この一節において抽象的に述べられている法則を、ピロトーの場合について具体的に検討すること、それこそがわれわれの行うべき作業となろう。

### 「知能」と社会的地位のアンバランス

今になってあなたは、私たちが額に汗して稼いだお金を馬鹿らしいことに使ってしまったというのね。(44) [···] 私は (お前は私のことをまったくの馬鹿(bête)だと思っているが)、すべてのことを考えてみないほど馬鹿ではないよ。(44) [···] このことの裏には、何かあなたの気がつかない陰謀があるのよ。(46) [···] まったく信じがたいことだ。家の外ではみんな私には能力があると認めてくれるのに、ここでは、自分が気に入られたいと思うただひとりの人間、汗水たらして幸福にしてやろうとしている唯一の人間が、まさしく私を馬鹿(bête)だと思っているんだからね。(48)

これは作品冒頭において10ページ以上にわたって続く「夫婦の口論」(初版第1章のタイトル)を抜粋して要約したものである。王室に髪粉を納入する香水商であり、王政復古以来パリ第二区の助役の地位にあるピロトーが、(ブルボン王朝派の結束を固めるために濫発気味であった)レジオン・ドヌール勲章の拝受という名誉に答えて自宅を大改造し、舞踏会を開くことにしたと告げると、妻は「馬鹿らしいこと bêtises」にお金を使うのは止めてくれと懇願する。これに対してピロトーがマドレーヌ地区の土地に対する投機事業に参加して儲けるから心配ないと言えば、妻は「あなたの気づかない」陰謀があるに違いないと諭す。「上流社会に地位を築こう(43)」という夫と「香水商なんだから、香水商らしくして(51)」という妻とのいさかいの争点は、金の使い方にせよ稼ぎ方にせよ、ピロトーがそれらを適切にそして抜けば目なく遂行するだけの能力を持っているか否かという点にあるのだ。

根負けしたピロトー夫人は「注意はしましたからね。後は自分で考えて行動してください(51)」と言って信頼しきれない夫の頭脳にすべてを託すのだが、彼女の暗い予感はずべて的中してしまう。ピロトーは改築や舞踏会にか

かった費用を支払うことができず、投機に出資した大金は詐欺にあつて泡と消えるのだ。語り手は主人公を「凡庸な人間 *petits esprits*(54)」の一人であると述べて、自分は「馬鹿 *bête*」ではないとするピロトーの主張を一蹴し、第1章を締めくくっている。

では一体なぜ、ごく限られた能力しか持たないピロトーが、それまで商業的成功と公人としての名誉を手に入れることができたのだろうか。第2章に書かれている彼の半生の成功物語を以下に要約した上で考えてみたい。

まずは14歳でパリに出てきた頃の様子。「機知や教育はなかつたけれど、本能的な実直さと優しい感情に恵まれていた。(55)」その後、香水店<バラの王妃>を営んでいたラゴン夫妻の見習い店員を2年続けるうちに「商品、価格、数字については新入りが知るよりも詳しく(56)」なり、こうした記憶力のおかげで重用されるようになる。

しばらくすると徴兵令によって年上の店員たちがごっそり消えてしまう。昇進によって月給の上がったピロトーは、アシニャ紙幣切り下げ前に国債を買って財産の基礎を築き始める。その後「若さの熱気に引きずられて(58)」国民公会に対する陰謀に参加。「サン＝ロック教会の階段でナポレオン相手に戦い、騒動が始まるとすぐに負傷(58)」する。ピロトーは以後一切の政治的行動を控えるが、この事件が王政復古後の彼を「ひとかどの人物(76)」に祭り上げることになる。

1800年にコンスタンスと結婚。ラゴン夫妻の店を継ぐ。初めは小売專業だったが、ハンドクリームと化粧水の製造販売を始め大成功する。しかしながら、広告の手法は流行品店のそれを「まねた(64)」だけであり、東洋ブームに便乗した<後宮の妃クリーム>という商品名など「普通の間でも(64)」考えつける。宣伝文に至っては、その「おかしな語法(65)」が世間の人を喜ばしたにすぎないとされる。

事業の成功は、小売店に高率のマーゲンをとらせて薄利多売を実現した妻コンスタンスの手柄。「家賃の高騰を予測して(67)」しかるべき措置を取ったのも、本業をなおざりにして商事裁判所の仕事に没頭する夫を引き止めたのも、嫉みを避けるために区長ではなく助役の地位に甘んじるよう勧めたのも、すべて「先見の明のある(70)」ピロトー夫人なのだ。ピロトーは「臆病で凡庸、無教養、無思想で知識もなく性格も弱く(71)」、ただ「品行の感覚、正義感、真のキリスト教徒の善意(71)」などだけがその美点であるとされる。

こうしてみると、ピロトーのこれまでの社会的成功は、せいぜい記憶力や模倣の才しか見るところのない彼の「知能」によってではなく、政治的な偶

然と妻の力によって成し遂げられたものであるということが分かるだろう。最後に語り手は次のようにまとめている。

セザール・ピロトーとはこうした人間だった。尊敬に値する人物なのだが、人の誕生を支配する神秘が、彼に政治および人生の全体像を判断する能力、あらゆることで型どおりのやり方にしがう中流階級のとどまっている社会的水準を超えるための能力を授けてくれなかったのである。中流階級の意見はすべて彼に伝えられ、彼は吟味せずにそれらすべてを実行した。(80)

「人の誕生を支配する神秘」によって、ごく限られた「能力 *faculté*」しかピロトーは授からなかったというこの一節は、『優雅な生活論』や『ルイ・ランベール』において表明されていた、人間の器官の不平等という考えの延長線上にあるだろうし、また「政治および人生の全体像を判断する能力」という表現は、兄フランソワと同じく、彼がさまざまな要素の絡み合うような複雑な問題の解決を不得手にしていることを示唆している。つまり第1章に続いて第2章でも、ピロトーの「知能」はごく限られたものであって、現在の社会的地位を甘受すべきとされるわけだ。

しかしながらピロトーは、冒頭の口論において見られたように、さらなる出世を夢見ている。しかも、今回は妻の助言を願い下げにしているのだ。彼の成功をこれまで支えてきた大事な柱をはずすようなこの行為は、無謀な挑戦と評されても仕方ないだろう。それにもう一つの柱である偶然が消え去る可能性もある。そうなればピロトーは、妻と偶然という二つの強力な補助を失い、自分の弱い両肩だけですべてを背負うほかなくなる。事実、それこそが彼の身に起ころうとしていることであり、これによってピロトーの「知能」はこれまででない試練を迎えることになる。そしてそれは総合的思考力を持たない彼にとって、あまりに過酷なものであった。ピロトーの新たな野心は、彼の「知能」と社会的地位との間にもともとあった不均衡をさらに増幅させる。今やすべてが一瞬にして崩れ去ろうとしているのである。

## 破産のメカニズム

ピロトーの破産はいかにして起こったのか。この問いに対して完全な解答を与えることは、想像されるほど簡単ではない。一見すると、公証人であるロガンによって大金を持ち逃げされたことが、すべての原因であるようにも思える。もしそれが原因ならば、ロガンの人間性に対するピロトーの判断が甘かったというほかないだろう。ところが、その陰で糸を引いていたのは、

ピロトーに対して個人的な恨みを持っていた元店員のデュ・ティエであった。となると、この怪しい銀行家に対する警戒を怠ったことこそが、破産の最大の原因ということになる。

しかしながら他方で、この持ち逃げがなかったにしても破産は避けられなかったという指摘がある。コンスタンスの伯父であるピュローによれば、投機に回したはずの金はいずれにせよ手元のない金であって、ピロトーが追い込まれた支払停止と持ち逃げによる損失との間に直接の関係はないのだ。このことから、なぜピロトーは自分の財力に不相应な投資を決断してしまったのか、という疑問が大きく浮上することになる。

もちろん、ピロトーなりの収入見込みはあった。一つは新製品<セファリック油>から上がるはずの収益であり、もう一つは、たとえ全額支払いを終えていなくとも、土地の所有者になりさえすればそれを担保にして得られると考えた金である。しかし前者については時間的に間に合わず、後者については持ち逃げによって微妙な立場になったせいもあって誰一人取引きに応じてくれない。こうしたことからすると、ピロトーの見通しの甘さと不運との両方が破産の原因であると言えるのかもしれない。

最後に視点は変わるが、そもそもなぜ破産がピロトーにとって破滅を意味したのかも問われるべきであろう。作中において証券取引に関わる人々の半数以上が破産経験者であるとされるほどに、当時の商業界において破産はごく普通のことであったのだから。これについては、ピロトーが破産者をひどく軽蔑してきたという事実が思い出される。いざ自分が破産したら開き直るという選択肢もあっただろうが、それができないのが彼の善良さでもあり命取りとなる弱さでもあった。

こう考えてみると、ピロトーに欠けていたのは、詐欺から身を守るための警戒心、長期の収支計画をたてる能力、自分の失敗を甘受できるだけの心の準備、といったところであろうか。しかしながら、こうした弱点は、究極的にはただひとつのこと、彼の「知能」の不十分さを意味しているように思われる。目に見える現象の裏を読み取ったり、種々の事柄を全体の流れの中到的確に配置したり、先の可能性を考慮して現在の行動を決定したりするために必要になるような、複眼的で総合的な思考力がピロトーには欠落しているようなのだ。

たとえば、デュ・ティエの陰謀にしても、それを見破るチャンスがピロトーに全くなかったわけではない。それどころか、ロガンの事務所の窓からデュ・ティエの姿を見かけた時、ピロトーは「不安」と「疑念」を感じている。

まだ投資の中止が可能だったこの時、なぜ彼はそうした「不安」と「疑念」を解消するための行動に移らなかったのであろうか。語り手はこれを次のように説明している。

疑り深い観察家、商売で詐欺師に何人か出会ったことのある商人ならば助かったであろう。しかし、ピロトーの経歴、そして有能な人間が原因に到達するために用いる推論の鎖をさかのぼるにはほとんど向いていない彼の頭脳の無能さ、すべてが彼を破滅させた。(105)

デュ・ティエがかつて店の金庫から三千フランを盗み出した悪人であろうとも、ただロガンの事務所に姿が見えたということだけで、推論によって陰謀の存在を見抜くことは神業にも等しいであろう。ところが、ピロトーは直感の力によって「彼は事業に加わっているのだろうか(104-105)」という自問にまで一瞬にして到達している。つまり物事の全体は見えずとも、その輪郭をぼんやりと感じることならば人並み以上にできるのである。問題は、そこから思考を四方に伸ばしていったさまざまな反省材料を意識的に検討し、最終的に妥当な結論を出すために必要になる思考力に恵まれていないことであろう。事実、ピロトーは新たな情報、すなわちデュ・ティエと愛人関係にあるロガン夫人の姿を目にするというただそれだけのことによって、彼がそこにいることは不自然ではないと結論してしまう。漠然とした状況判断によってのみ、ピロトーは動かされているのである。

ピロトーの「知能」のこうした不十分さは、舞踏会が終わって現在の巨額の債務と将来の利益の見込みの間に一人立たされていることにあらためて思い至った本人にも、徐々に自覚されるようになる。上流階級に地位を占めるためには迅速な資産形成が不可欠であると考えたピロトーは、投機という名の近代的な錬金術を利用することに決めたのであったが、それが必要とする長期的なスパンでの資金計画を自分が持っていないことに今更ながら気づく。

セザールは店のガラス窓越しに通行人を眺めながら、重荷になり始めた自分の商売の広がりについて考えていた。それまで彼の人生ではすべてが単純だった。製造して売るか、転売するために買うだけだった。しかし、今や土地投機の仕事、ポピノ商会への投資、市場に投入した十六万フランの返済、このためには妻の嫌う手形取引かポピノのところでの前代未聞の大成功しかないのだが、そうした多くの思惑の複雑さがこの哀れな男を怖気づかせた。自分が持てる以上の糸玉が手の中にあるような気がした。(180-181)

自己資金による伝統的な家族経営を行っていた時には、日々の売り上げをいかに増やすかという一点だけに心を砕いていればよかったピロトーであるが、借り入れによって資金調達をし、事業を多角化することによって、心配すべき事柄があちこちに分散して生じるようになる。これはピロトーにとって全く未知の経験であった。そうした中で彼が自分の状態を「自分が持てる以上の糸玉が手の中にあるよう」と表現しているのは興味深い。これは明らかに、『歩きかたの理論』にあった社会的人間の持つ弱さ、すなわち無数の考えがあるために一つ一つについての把握が不十分にしかできないという弱さを、ピロトーもまた感じていることを示している。彼は「多くの戦線と同時に自らを防御するために必要な力強い能力(202)」を持っていないのだ。

自分の「知能」に対するピロトーの不信感は、ロガンによる持ち逃げ事件を知らされた時に最高潮に達する。事業の失敗が予感された時、彼は自分の「頭」など不要だと言い放っている。

「わしの舞踏会、勲章、二十万フランの手形の流通、空っぽの金庫。ラゴンにピュロー…それに妻もよく分かっていたな。」

人を打ちのめすような多くの想念と、前代未聞の苦痛を呼び覚ます不分明な言葉が雨と降り、雹となって<バラの王妃>の花壇の花を残らず台なしにした。

「誰かに私の頭を切り落としてもらいたいです」とようやくピロトーは言った。「大きすぎて邪魔なのです、何の役にも立ちません…」(189)

ほとんど文章にならない第一文の言葉の羅列は、それらがピロトーの頭の中でもともとしっかり結び合わされていなかったことを示しているだろう。これまでただ雑然と記憶の中にため込まれていた数々の情報が、それらを支えていた成功の夢が弾けることで、冷たい雹のように地に落ちる。語り手によって「あらゆる作戦が頭の中でひしめきあい、この虚空での活動を彼は才能の実質的な行為だと思い込んでいた(117)」と酷評されていたピロトーであったが、これまでは不安はあっても乗り切れると信じていた。それが今や、その大きさが無駄であると感じるほどに、自分の頭の中の空虚を強く感じている。この後、セザールは「脳の充血(191)」に倒れ、回復のあと金策に走り回るのだが、デュ・ティエを含む銀行家の間でたらい回しにされるだけで、支払停止の危機が目の前に迫ってくる。そんなある日、家賃の支払い延期をきっぱりと断られたピロトーは、ついに迫り来る破産の足音を聞く。

破産の弔鐘が耳に鳴り響くのを彼は聞いた。鐘の音の一つ一つが非情な法解釈に基いて彼が破産者たちについて述べた言葉を呼び覚ますのだった。それら

の意見は、彼の脳の柔らかい物質の上に火の文字となって浮かび上がってきた。  
(245)

まさか自分がいつか破産の憂き目にあうとは思ってもよらなかったピロトーは、「破産者はみんなどこか怪しいんだ(184)」といった厳しい意見を公然と表明していた。周囲の人間はやんわりと論じていたのであったが、ピロトーはそれを頑として聞き入れなかった。ところが今、自分もまたそうした軽蔑すべき破産者の立場に置かれようとしている。破産する自分をもっとも厳しく裁くのは、過去の尊大な自分なのだ。それは、当然「脳」の中の出来事となるはずだが、すでに「脳」の機能が低下しつつあるピロトーにとって、それは致命的なダメージとなる。失敗の可能性を配慮せずに、ただ成功を続ける現在だけを信じて生きてきたこと、それが彼の破産を人生の破滅にも等しいものとしてしまうのである。

ピロトーは偶然と妻に助けられつつ、自分の「知能」に見合った事業において成功を収めることで、中流階級において確固たる地位を作り上げた。ところが、自分の生まれついた「知能」の限界を知らずにさらなる出世を目指したことで、「原因」と「結果」のアンバランスを助長し、これまでに築いた地位さえも「崩壊」させてしまう。ピロトーは助役を辞任し、勲章を外し、破産申請を行うことになるが、それは「知能」と社会的地位との正しい対応を望む近代社会の見えない掟が執行されたからなのではなかろうか。近代社会は、その複雑になった仕組みを理解する「知能」のない人間をピラミッドの上層部に受け入れることを拒絶するのである。

ところが、セザール・ピロトーの物語にはさらに続きがある。彼は破産を乗り越え、全額返済という名誉ある復権を果たすのだ。はたしてこれはピロトーの「知能」における何らかの変化を意味するのだろうか。われわれの答は否である。以下においてその理由を述べておきたい。

## 復権のメカニズム

はじめに、破産後のセザールの様子を確かしておこう。それは住み慣れた教区から追放された後の兄ピロトー神父のそれに驚くほど似ている。表情が「思考 *pensée*」によってすっかり変わってしまったとされるのである。

この勤め人に出会う商人たちはそこに香水商の面影を少しも見出さなかった。この上なく深い悲しみが喪のヴェールをかけた男の顔を見て、彼と直接関係のない人々は、人間がどれだけ失墜できるのか、その果てしなさについての観念



を抱いた。なぜなら、以前の彼には決して見られなかった思考によって、彼の顔は一変していたからである。(288)

反省すべき過去も憂慮すべき未来もなく、ただ商品を作って売りさすればよかった頃のピロトーにおいて、「思考」とは忙しい毎日とともに流れ去ってゆくだけのものであって、頭の中に滞留してその存在を外部に強く示すようなものではなかった。それが破産によって一変してしまう。ピロトーにとって破産とは一種の罪であって、贖罪を済まさない限りはいかなる自由もあり得ない。勤め人となって自分の賃金のすべてを債務返済に充てると同時に、悔悛と祈りによって内面を浄化しなければならないのである。そうした切なる思いが「希望の混じった侵しがたい諦念の表情(288)」を生み出し、ピロトーに宿った「思考」の徴候となる。

しかしながら、この「思考」が復権に果たした役割は微々たるものにすぎない。全額返済に必要な二十数万フランのうち、ピロトーが祈りにも似た日々の労働から稼ぎ出したのは一万フランにも満たないのだ。ピロトーの内に生まれた「思考」は、復権への大胆な方途を探し当てて前進するためのものでは決してない。それは過去の失敗が彼の「脳」に刻んだ生きた傷のようなものであって、悲惨な現状に正しく耐えることを教えるだけなのだ。

では、一体どんなからくりによって復権が果たされたのか。ここで注目されるのが、以前のピロトーを支えていた偶然と妻という二つの力である。「崩壊」後の「回復」もまた、この二つの力によって実現されるのだ。

ただ妻の力については、娘セザリーヌや伯父ピュローの貢献も含めて、親族の力と言い換えるべきかもしれない。その中でも重要なのが、セザリーヌとの結婚を夢見るポピノの活躍である。彼は<セファリック油>を成功させることで、共同経営者たるピロトーに巨額の利益を分配し、さらには将来の見込みに基いて前払いもする。ピロトーは自分の娘を売るようなまねはしたくないと言うのだが、「私は買われたいのよ(303)」というセザリーヌの言葉もあり、最後にはこれを承諾する。

親族の協力を受け入れたピロトーには、偶然もまた味方するようになる。破産後の競売によってデュ・ティエの所有となっていた土地の価格が、サン＝マルタン運河の開削計画によって高騰し、土地に賃借権を持っていたポピノがデュ・ティエから大金を引き出すことになるからだ。ポピノはこの金をピロトーの債務返済に迷わず充てるだろう。さらには、ピロトーによる債務返済の努力を国王が「偶然によって(299)」知ったという一節も見逃せない。ピロトーはこうして国王から六千フランの現金を授かることになる。

ピロトーの「知能」の不足は、妻と偶然の援助によって築かれてきた社会的地位を彼一人で支えることを許さなかったが、いったん親族の助力を受け入れる決心をすると、幸運もまた戻ってくる。ここに認められるのは「個人ではなく家族が社会を構成する真の要素<sup>16</sup>」だと述べるバルザックの復古的とも言える信条と、いくらでも都合の良い偶然を作り出すことのできるフィクションの全能であろうが、いずれによ復権がピロトー本人の「知能」とは関係なしに達成されているということが重要であろう。バルザックは、作品冒頭においてセザールをごく弱い頭脳しか持たない人物として造型したが、それは最後まで堅持されているのである。こうして、不幸から幸福へと一気に上昇させられたピロトーは、復権を祝う不意打ちの舞踏会を前にして、疲れきった「脳」に致命傷を負ってしまう。

喜びはすべての心の中であまりに強かったので、誰もがセザールの感動と二、三度よろめいたのをごく自然な陶酔のせいだと考えたが、こうした陶酔こそがしばしば命取りになる。自分の家に戻り、自分のサロン、舞踏会用の衣装を着た女性の混じる招待客を再び見て、突然ベートーヴェンの偉大な交響曲の最終章の勇壮なメロディーが彼の頭と心臓の中で爆発した。その理想の音楽があらゆる音階で輝き、沸き立ち、この疲れた脳の髄膜の中でらっぱを鳴らした。それはこの脳にとっての大フィナーレになろうとしていた。(311)

もしも、ピロトーに自力で復権を果たすだけの力があつたならば、彼がここで倒れることはなかったのではないか。ピロトーは、「知能」が足りないまま社会的に上位の階級へと移動しようとし、その失敗のせいですでに「脳」を傷めていた。悲しみにせよ喜びにせよ、ピロトーの「脳」はいかなる不意打ちにも耐えられないような状態にあつたのである。ピロトーの死はこうして引き起こされ、同時に人体器官の限界についてのバルザックの考えを正確無比に伝えることとなった。

## 結び

バルザックは、自由競争の原則が支配する近代社会においては「知能」の高い人間が社会階層の上位を占め、「知能」が不十分であれば中位以下にとどまると考えた。そうした主張それ自体は注目すべきものではないかもしれな

---

<sup>16</sup> *Avant-propos*, CH, t. I, p. 13.

いが、バルザックにおいて興味深いのは、この「知能」が「脳」という器官の視点から捉え直される点である。その結果、当時の脳科学が解剖学的な知見に偏っていた<sup>17</sup>ことに影響されたのか、バルザックは個人の「知能」水準を「脳」の形態と同じく固定的なものと考えがちになり、本能人、抽象家、特殊家といった三区分を立て、人類における相対的に安定した階層構造を夢想することになった。そうした階層構造は同時代の無秩序な光景によって引き起こされた、秩序へのノスタルジックな夢にすぎないのかもしれないが、いずれにせよ複雑化した近代社会において上位を占めるためには、総合的で複眼的な思考力が必要になるということをバルザックは感じていた。

一見したところ単に破産という経済的現実を描いたにすぎないように見える『セザール・ピロトー』にしても、ピロトーの「知能」が破産の前後においてまったく変化しない点は、「知能」についてバルザックの決定論的な考えを明かしている。また「脳の柔らかい物質」とか「脳の髄膜」といった非常に直接的な表現がときたま現れるのは、バルザックにおいて「知能」と「脳」の間に恒常的なつながりがあったことを示している。ある人間の「知能」は「脳」と同じく生まれつきほぼ決まっているのに、競争原理が支配する近代社会では多くの人間が知らずに無理をして苦い失敗を嘗めさせられている、というのが『セザール・ピロトー』に読み取れるバルザックの考えであろう。『人間喜劇総序』には「ピロトー兄弟、すなわちピロトー司祭と香水商ピロトーの不幸は私にとっては人類の不幸である<sup>18</sup>」とあり、ピロトー一家の悲劇がすべての人に共有され得ることが示唆されている。

人間を一個の社会的存在として安定させている「脳」の限界は、ルイ・ランベールのような天才の想像力<sup>19</sup>か、興奮剤の使用によって<sup>20</sup>一時的に打ち破られることもあるだろう。しかしながら、それによって近代社会において「脳」が置かれている基本的条件が変わるわけではない。「脳」の限界が人によって生まれながらに決まっているという説は別としても、拡大と複雑化を続ける世界を前にした近代人の「脳」が一般に過剰な活動を強いられ、いつどこで

<sup>17</sup> 拙論を参照。「バルザックにおける「脳」—イメージの生成と作品世界における展開」、『仏語仏文学研究』第25号、東京大学仏語仏文学研究会、2002年、p. 111-128。

<sup>18</sup> *Avant-propos*, CH, t. I, p. 17.

<sup>19</sup> 「彼の額は天才の圧力によって今にも破裂するかに見えた。」*Louis Lambert*, CH, t. XI, p. 623.

<sup>20</sup> 「あなたの脳は新たな能力を獲得する。もはや頭蓋の重い冠状骨を感じることもない。」*Traité des excitants modernes*, CH, t. XII, p. 322.

決定的な弱さを露呈してしまうか分からない状態にあるというバルザックの指摘そのものは妥当であろうし、現代においても十分通用するのではなからうか。